

Second Growth : 次の目標に向けて



小野昇子

三井化学(株)ESG推進室
[104-0028] 東京都中央区八重洲2-2-1 東京ミッド
タウン八重洲 八重洲セントラルタワー
ESG推進室長, 博士(理学).
専門は表面科学.
<https://jp.mitsuichemicals.com/jp/sustainability/index.htm>

皆様、ご無沙汰しております。前回本誌『高分子』に寄稿させていただいたのは、2009年9月号の連載「グローイングポリマー」でした。「私がここにいる理由～Reason for being」と題し、「私は多様性の一つであり、私にしかない視点がある。だからこそ、私がここにいる理由がある」と、自分のアイデンティティと存在意義を模索していた当時、まさに成長の途上で、それをそのまま誌面にさらすような記事でした。それから17年。個人的にも、化学産業を取り巻く社会環境としても、実に多くの変化がありました。社会と化学産業との関係性が大きく転換しつつある今、再び執筆の機会をいただいたことを一つのご縁と受け止め、本稿では「Second Growth : 次の目標に向けて」と題し、今感じていることを綴ってみたいと思います。

私は、固体触媒の研究室を卒業後、三井化学に入社しました。入社9年目に海外研究派遣制度で2年間フランス・ストラスブールにある国立科学研究センター(CNRS)にて、Gero Decher教授のもとで高分子薄膜の研究に携わり、研究室内外で触れた多様な価値観、研究スタイル、そして生き方は、その後の私の人生に大きな影響を与えました。帰国後は、フランスで培った高分子薄膜技術を基盤に、半導体分野向けの材料開発に取り組みました。実験室で得られた研究成果を社会実装するには、研究→開発→製造→物流→営業→事業と多様な視点と責任の連鎖で成り立っている現実に直面し、改めて自分の役割や存在意義を見直していました。「グローイングポリマー」を執筆したのはちょうどその頃です。

その後10年以上にわたり、半導体分野において世界最先端企業の方々と仕事を共にする機会に恵まれました。最先端企業は業界の流れを読むのではなく、自ら流れを創り出します。誰よりも早く一手を打ち、一方でその成功確率を高めるために幾重もの代替手段を用意する。一流の攻めと守りを学びました。また、長いバリューチェーン全体を俯瞰し、違う角度から見ると新たな経路が見つかることを知ったり、顧客、サプラ

イヤー、競合という立場を越え、同じ課題に向き合う同志としての関係も築かれました。今では、難しい課題に共に向き合ってくれる仲間たちや、人生の岐路に立ったときに相談に乗り支えてくれる心の友に恵まれたことは、かけがえのない宝物です。

2026年4月より、ESG推進室へ異動し、当社グループのサステナビリティを統括する役割に挑戦します。気候変動の進行、自然災害の頻発、AIに代表される技術革新、地政学リスクの高まり——社会は明らかな転換点にあります。化学産業に求められる役割も、単なる素材供給にとどまらず、社会課題の解決にいかに関与するかが問われる時代です。原料調達から製品使用後を含むバリューチェーン全体を俯瞰し、化学の力をどこにどのように活かすのか。その問いに向き合うことが、今後ますます重要です。振り返れば、中学生の頃「国連で環境の仕事がしたい」と夢見ていました。卒業論文の書き出しは「あと50年で石油枯渇が懸念される中…」。30代でAl Goreの著書を基にしたドキュメンタリ『不都合な真実』を観たとき、胸を突き動かされるものがありました。化学と環境(Environment)、社会(Society)の関係を考えることは、長い間、私の内面に流れていたテーマだったのかもしれませんが。さらにESGのG、すなわち企業統治(Governance)は、企業の存続そのものにかかわる重要な要素でもあります。

これから向き合う世界は、これまでの自分の経験や知見が必ずしも通用しない、広く、深く、複雑な領域だと思います。だからこそ、一度それらを手放し、白いキャンパスになる気持ちで学び直し、丁寧に挑戦していきたい。そして、「ESGこそが企業の事業競争力の源泉である」と語れるようになることを、次の目標としています。

もし三度目の執筆の機会をいただけるなら、そのときは70代でしょうか。「Second Growth」がどのような結末を迎えたのかをご報告できる日を、今から楽しみにしております。それでは、また。